

熊本藩の医学教育

松崎 範子

熊本大学医学部同窓会 熊杏会

熊本藩には再春館という医学校がある。村井見朴という民間医の家塾をもとに、藩が設立した医学校である。教育体系は村井見朴とその長子椿寿(琴山)によって築かれ、教育内容は椿寿の吉益東洞への入門により古方派医術を取り入れて、再春館は漢方の医学校として整備された。この功績を評価した藩は、椿寿を藩医に登用する。するとその後も村井家は藩主の御匙となり、家塾では門人教育と診療を続けた。このように医学校と家塾とが併存する熊本藩の医学教育とは、具体的にはどのような形で展開するのか。これについては藩の外科医鳩野家と、下益城郡の在医谷田家の史料が伝える。

鳩野家はもともと長州毛利家の家臣で、中島姓であった。浪人して長崎に行き、「長崎阿蘭陀安流湯周一流之外科伝授」をされて医師となった中島宗巴は苗字をここで鳩野と改め、西洋医法をもって大坂で開業し、鳩野家は代々宗巴を名乗った。細川家の侍医として召し抱えられるのは2世宗巴の代、元禄14年(1701)のことである。宝永7年(1710)には知行200石を拝領した。

文化12年(1815)の生まれの7世宗巴の代に、鳩野家は転機を迎える。7世宗巴の医学修業は、医学の基礎は藩の医学校再春館で学び、父6世宗巴からは外科を伝授された。18歳になると家伝のアルマンスやカスパルの時代の古い医法におさまらず新たな医術を追求するようになり、紀州に華岡青洲という外科医がいることを知った。しかし遠遊の学資がないため、隣藩豊後竹田岡藩で華岡流の医術を学んだ医師に入門する。3年間の修業で華岡流医術を学んだ7世宗巴は、天保10年(1839)に藩からの支援を受けて「活人堂」という診療所を開く。そして「亦楽舎」という家塾を興して、外科修業の門人を受け入れた。文久3年(1863)11月14日に49才で死去するが、門人帳によると「亦楽舎」には114名の入門者があった。内訳は藩内から46名、藩外から68名である。

7世宗巴が診療所や家塾を開くにあたって藩が支援した理由であるが、これには全国的な華岡流医術の展開があったと考えられる。熊本藩から華岡塾への入門者は多くはないが、文化10年の2人の医師の入門に始まり、7世宗巴が家塾を始めるまでに4名が入門していた(『日本医史学雑誌』第59巻第1号「華岡鹿城末裔所蔵の「華岡門人録」について(4)」)。

いっぽう谷田三順の医学修業は、享和2年(1802)8月の村井椿寿への入門に始まるが、同時に藩医福間恵迪にも入門して外科を学んでいる。三順の長男宗弦は文政10年(1827)に21歳で、本道を村井冠吾(椿寿の子)、外科を福間恵迪、経絡を松岡玄迪と3つの藩医の家塾に入門しながら、再春館にも入学した。3男桃吾も16歳の時に村井同雲(椿寿の孫)に入門し、同じ日に再春館に入学している。鳩野家との関係ができたのは、2男怡沖が天保10年10月6日に門人となったことによる。

すると弘化2年(1845)7月14日に鳩野塾に入門した長州萩藩佐村甚右衛門末子佐村文斎は、2か月後の9月に「療治為見習」という目的を掲げて谷田家で修業を始めている。これは三順が2男怡沖との関係から7世宗巴から協力を求められると、実地研修に協力する関係にあったことを示す。そればかりか三順は、天保14年5月から上益城郡の在医伴敬哉の養子伴貢三を弟子にして医学修業をさせ、弘化元年正月には再春館に出席させたりえ、谷田家の師家村井家に入門させている。

以上の内容から判明することは、熊本藩の医師は必要とする師家を藩内で選び、藩の医学校と組み合わせることで医学修業をしていることである。これは熊本藩の医学校と家塾が、医学教育において補完する関係にあったことを示す。